

沖繩戦で四回出撃

愛知県 浅野善彦

私は昭和二（一九二七）年三月二日生まれで、家族は両親、祖母、弟二人と私の六人です。家が貧しかったので中学（旧制）に入学したくても行けませんでした。

なんとか勉強をとの思いから予科練に入ったら、勉強もできると共に国のお役に立てると思いい、昭和十八年六月、十六歳で予科練（特乙二期生）として岩国航空隊に入隊しました。

しかし十代の青春は、厳しい軍隊生活の毎日でした。精神棒（野球のバットより太めの木棒）で尻を殴られることは毎日の日課でした。想像以上の苦しい訓練も若さで乗り切りました。

訓練期間を卒業すると直ちに一線部隊配置になりました。木更津基地から硫黄島へ、次にグアム島基地で、厳しい訓練を受け、部隊はトラック島

春島基地に移り、アメリカ機動部隊索敵作戦に従事しました。

二回目の出撃でアメリカ機動部隊を発見するも敵空母のグラマン戦闘機と交戦、機銃を打ちまくりました。生まれて初めての殺し合いです。穴だらけの乗機で七百カイリの海上を飛び基地にやっとなりました。

昭和十九年六月、トラック島より参謀を乗せてペリユー島基地で給油、ミンダナオ島ダバオ基地への要務飛行も忘れられない思い出です。当時の参謀は雲の上の人です。同乗で緊張の中でも初めて見るチェリー島基地の青い海、ダバオ基地でも見た椰子の並木路、ダバオ富士と呼ばれていた山などの景色は、短い間でしたが戦いの間の心の安らぎでした。

トラック島の春島基地に戻ると元の厳しい戦いに戻りました。出撃しても戻らない飛行機が多くなり、やがて飛行機が無くなりました。補給も無く飛べない、むなしい日々が続きました。

昭和十九年十月、生き残った搭乗員は伊号潜水艦で内地に戻りました。生まれて初めての潜水艦に乗り、潜水艦の狭い艦内で、濁った空気の中で戦う乗員の苦勞を味わいました。飛行機乗りで良かったと思う一週間の船旅でした。

横須賀軍港に着き本土の土を踏んだときは涙が自然に出ました。半年間の外地勤務でしたが日本は良いなあと、つくづく感じました。勤務地が豊橋航空隊になりましたので一年四カ月ぶりに自宅に帰りました。

私の顔を見て父が「お前生きていたか」が最初の言葉でした。母は涙で何も言えませんでした。四月にグアム島に出発の折、木更津基地に面会に来てくれたときに、グアム島に行くことを話したので、グアム島の兵士が全滅（玉碎）した報道がされていたので、善彦は戦死した事と想っていたところに私が帰ってきたので、びっくりしたのでしよう。そのときの両親の顔は今でも忘れられません。半袖、半ズボンの防暑服で十月の日本は寒か

ったですが、すぐに馴れました。

新しい勤務地、豊橋航空隊はどんな所かと楽しみと心配が入り交じった気持ちでした。豊橋航空隊では前線帰りということで、訓練の助教として勤めました。

昭和十九年十二月、濃尾地震が起き、飛行場一面に亀裂が入り、私は滑走路近くにいましたが立っておれなくなり座り込みました。アスファルトの滑走路が、見ている内に亀裂が入り地震の恐ろしさを知りました。

昭和二十年二月に入るとB 29が名古屋空襲のため豊橋上空を通過するようになりました。二月中旬には初めてアメリカ艦載機が基地に来襲、被害が出ました。三月初めには特攻隊の話が出ました。三月十日、特攻隊の編成が始まり、私も特攻隊員に任命されました。藤川大尉が隊長で「藤川特攻隊」が編成される。来るべきものが来たという気持ちで特に考えることはありませんでした。同期の鈴木と同じペアで戦えることも良かった、と思

いつつも特攻隊員となっても何も変る事もなく訓練に励みました。一人でいると特攻のことを考えるので熱中できる事を、いろいろ考えます。酒もタバコも自由でした。

昭和二十年四月二日、小松基地より九州出水基地に進出することになり、基地にて別れの宴が行われました。そして司令以下隊員の見送りを受け出水基地へ出発しました。生き残った特攻隊員として当時のことは、六十年以上過ぎても忘れることはありません。

何も求めることなく命令されれば出撃して行くのみで、名も命も惜しまず、国難に身を捧げて散った友の顔は今も忘れる事はありません。出撃までのX日を待つ間の苦しみは筆舌で表わすことはできません。出水基地は特攻基地で、小松基地とどこか違いました。隊員の顔も緊張で恐ろしく見えました。

昭和二十年四月三日、出水基地において司令の訓示で作戦が変更になり、人間爆弾攻撃が魚雷攻

撃に変わったと言葉は一瞬分からなかったが、特攻攻撃が平常攻撃になったと分かったとき、全員が顔を見合わせ、ボソボソと話し合った事は忘れられない思い出です。

しかし、その後、二カ月間の沖縄攻撃では、私の隊長以下七割の隊員が戦死しました。私も四回出撃しました。もう駄目かと思ったことも数回、穴だらけの飛行機になっても生き残りました。

海面上十メートル、目標六百メートルくらいで魚雷を発射、投下、そのまま敵艦を超低空で飛び越えて回避します。操縦席の青白い計器を見てペア全員が無言の時間が過ぎ脱出できたときは顔を見合わせるのみです……。機長の「帰るぞ！」の声に、生きているんだと強く感じました。

その後、生き残った隊員は原隊松島航空隊（松島基地）に戻りました。そして部隊の編成替えによりペアも別れて、私は北海道美幌航空隊に転じました。

八月初め、神町基地（山形空港）に新しい型の

爆撃機の引き取りを命ぜられ、神町基地に移りました。塗装も新しい新造機で、これを美幌基地に空輸する任務でした。しかし八月十五日終戦の天皇陛下下の放送を聞くと搭乗員は直ちに復員を命ぜられ、飛行服のまま復員となりました。

我々搭乗員がいなければ飛行機は飛びませんので、我々搭乗員を優先させ、トラブルを避けたのだと思います。

戦後、戦友会で八月下旬、美幌基地よりアメリカ本土片道爆撃が実施されることになっていました。私を知りました。若し終戦が半月遅れていたら私はその攻撃の参加者であり、アメリカ本土の土となっていました。

南方方面の戦闘で生き残り、沖縄特攻で生き残り、幾度か生死の境を往復しましたが、人間の運命の強さを感じます。

私の軍隊経歴は戦争の推移に合わせて作られたと思います。戦争後期よりの搭乗員不足を補うため作られた予科練特別制度により採用された私は、

三年近い訓練期間を僅か十カ月で終了し、実戦が訓練という体験が海軍生活でした。そのため、同期生に七〇パーセント近い戦死者が出ました。

私も訓練終了、直ちに一線部隊へ入り「子供が戦争できるか」と言われました。しかし耐えて、しごかれおぼえていった戦歴です。今の十八、十九歳の若者にやれるでしょうか。飛行機乗りでありながら潜水艦にも乗りました。国内外の二十五基地に着陸しました。二年三カ月の間に、よくこれだけ飛び回り、事故もなくやってこれたと思います。

出水基地宿泊所で女学生の慰問品の布切れで作った人形をお守りとして頂き飛行機の操縦席の上に吊り下げました。出撃で飛んでいても自然と気持ちになごみました。激しい戦いの間にも人間同士の小さな楽しみと幸せを感じました。

戦死した友の遺品整理はいやな仕事でした。亡き友の顔が浮かんで、いつも涙が止まりませんでした。

戦争で生き残ったこの六十八年間で一番嬉しかったことは七十歳の折、叙勲で皇居豊明殿で天皇陛下にお会いでき、お言葉を頂いたことです。夢を見ているようでした。お写真を拝し、終戦の折の放送の事を思い出し、涙が止りませんでした。生きていて良かったとつくづく感じました。あの世に行って亡き戦友との話題もできたと思っております。

私が亡くなって「葬儀は家族のみで簡単でよい」が遺言です。願いは一束の白菊の花と軍艦旗を柩にかけてくれる事を遺言として残しています。南の海、沖縄の海に沈んだままの戦友の事を思えばそれでも有り難いと思っております。特攻隊員として運良く生き残って今日まで生かさせて頂いた事は最高の幸せと感謝の毎日です。

靖国神社には亡き戦友に会いにゆく気持ちで行きます。両手を合せると亡き戦友の顔が浮かびます。特攻隊員であることを語ることは全くありません。本年一月の新聞記事と今回のみです。

飛行機搭乗員として着陸した基地

内地（二十基地）

美幌、千歳、三沢、松島、神町、木更津、香取、厚木、豊橋、小松、美保、松山、徳島、雁の巣、出水、鹿屋、人吉、宮崎、宇佐、新潟

外地（五基地）

硫黄島、グアム島、ダバオ（比）、ペリリュー島、トラック島

計二十五空軍基地、総飛行時間、約四百時間

乗機 一式陸上攻撃機、九六式陸上攻撃機「白

菊」

予科練（岩国航空隊）四カ月、飛行練（大井航空

隊）六カ月、実戦部隊（前記）十七カ月

職歴略歴

昭和二十年 建設労働省

昭和三十五年 建設会社社員

昭和三十六年 会社設立 金属塗装業

昭和五十三年 板金業

昭和五十五年 別会社設立 配電盤組立業 社長、

会長歴任

昭和四十八年 工業塗装組合役員副理事長歴任

平成十四年 工業塗装組合技能検定委員

平成元年 予科練同期会会長（八年間）

現在 学区区政協力委員

賞

昭和五十三年 愛知県知事表彰 技能業務優秀

平成五年 労働大臣表彰 技能検定推進功績

平成九年 勲六等筆光旭日章 叙勲

軍歴

十八・六・一 岩国航空隊入隊 海軍二等飛行兵

特第二期乙種飛行予科練習生

十八・九・一 海軍一等飛行兵を命ず

十八・十一・十 卒業 第三十五期飛行練習生

十九・三・二十四 卒業

十九・六・一 海軍上等飛行兵

十九・十二・一 海軍飛行兵長

二十・四・一 海軍二等飛行兵曹

二十・九・一 任海軍一等飛行兵曹（特進）

海軍航空通信兵として

福島県 池亀 誠

大正十二（一九二三）年四月十二日、池亀家の六人兄弟の次男として生れた。家業は農業で、家は会津地方の北部に位置し、北に霊峰飯豊山を朝な夕なに望みつつ岩月小学校に通学していた。当時の当地は水田が少なく、農業収入のみでは家族十人の生活は楽ではなかった。父は土工仕事や山林の作業等にも出て生計を立てていた。

昭和十五（一九四〇）年ともなると日支戦争が激しくなり、長兄は召集令状が来て出征してしまつたので、農家の仕事は自分が担当することになった。現在の農作業はほとんどが機械作業となつたけれども当時はすべてが手作業であつたので農作業は重労働であつた。父は賃取り作業に出ているので、水田の一町三反歩の耕作は、私と母の二人が主な働き人であつた。